

1951.5.27

私はカントの範疇論を彼の反省概念論の立場から新セにつかみなおして見たいと思ひます。反省概念論とは申す迄もなくオーストリアの分析論の後に<sup>Part</sup>附録として附加えらるゝ反省概念の多義性についてといふ章であります。一、カントの反省概念論に關する諸見解は最初に尚題提起の意味で、ヘーゲルの「論理学」から短い言葉を引用させていたゞきます。彼は「概念論」のはじめの部分で「カントは先驗的論理学もしくは悟性論の附録として反省概念に關する論攻を附加えてゐる。これは直観と悟性、もしくはは存在と概念の向に横たわる領域で、ヘーゲルはおそらく彼の論理学における本質論を思ひうかべ、あたかもそれが存在論と概念論との媒介領域に當るやうに、カントの反省概念論を彼の直観論と悟性論、即ち感性論と分析論の媒介領域に當るものとして考へてゐたのではないかと思ひられます。このよゝうな解釈に従

20 x 20

Kyoto University

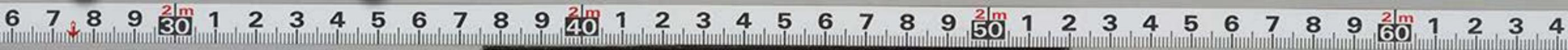


( )

えは、反省概念論は、「純粹理性批判」において、さ  
めた重要な体系的的位置を占めるものに見做さ  
れねばならない。記述がありませうが、ヘーゲルも上  
の引用文の直前の所で不満をもらしている。  
ように、カントは右の解釈にふさわしい位置を  
とるべきである。附録として体系的な外にはみ出した形  
で取扱ったにすぎません。このカントの  
取扱いとヘーゲルの解釈との違いは、どの  
ように理解されるべきでありませうか。  
普通に考えれば、いますように、反省概念論  
を単にライプニッツ哲学に対する批判的敘述に  
すぎないと思ふべきであらう。それが附録として取  
扱われ、この何らの矛盾も含まない  
記述であります。もしヘーゲルのような解釈を  
受容せるとするならば、どうかしてカントがそれ  
ほど重要な部分を附録という粗末な形で取扱  
つたのかという疑念を拂い除くことはでき  
ないであろう。しかし乍らこのように疑  
念を伴うからといって、ヘーゲルの見解をしり  
ぞり、単に矛盾を含まないという理由のみで一

20 x 20

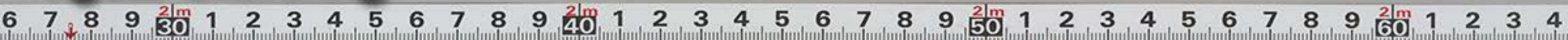
Kyoto University



一般的見解にしたがうならば、それは軽率にすぎ  
 るように思われます。何故ならば、弁論の附  
 録は、附録という形式がカントにおいて必ず  
 しもその内容の重要性と矛盾するもの  
 ではないという実例を示しているからであ  
 ります。周知のようによいところは後に才三  
 批判の原理が予め取扱われ  
 ているのであります。しかも反省概念論を  
 イマニツツ哲学に対する批判的叙述に  
 するべきでない  
 と見做す見解は、ライプニツツ哲学に  
 対する叙述  
 である。この附録の約半分に近いスペースが  
 さかかっているという事実によつて一  
 度保障されたい  
 るように見えますが、カントが自ら  
 ライプニツツ  
 学説の誤りをあげたこと、反省概念論  
 のもとに「予期しなかつた利益」  
 (der unerwartete Vorteil) (B.326) にすぎない  
 と云つてい  
 ることによつて、根柢からその論據をく  
 づかえされる  
 可能性があります。カントが反省概念論  
 において主題  
 としてい  
 るのは、ライプニツツ批判ではなく、  
 後で  
 ぐやしく説明  
 しますよ  
 うな先験的  
 反省であり、

20 x 20

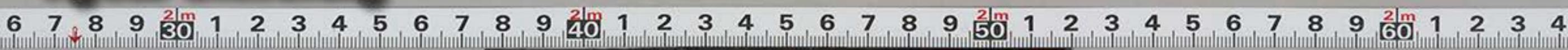
Kyoto University



更には反省概念であります。彼はその冒頭に  
 反省に關する定義をかゝげ、それを展開し、  
 三四頁にわたつてこの章の基本的原理につ  
 て述べ、しかる後に反省概念の一つ一つに  
 關して簡條的に説明を加えていゝのであり  
 ます。が、  
 ういふポニツツ哲学に關する敘述は最初  
 の原理的  
 左部分には全然現れず、反省概念の簡條  
 的説明  
 の部分に至つてはじめて説明のための実  
 例とし  
 て、即ち反省概念の多義性にあざむかれ  
 てい  
 る學說の实例として取扱われ、  
 いるにすぎない  
 といひが  
 あります。かように反省概念論が單  
 々に  
 ういふポニツツ批判の目的とするもので  
 ない  
 ことには明かであると思はれるのであり  
 ます。が、  
 今これにはヘーゲルの解釈はどのよう  
 に評價さ  
 れるべきでありませうか。  
 カント  
 の定義によりますと「反省 (Selbstlegung, reflexio)  
 とは与えられた諸表象と吾々の種々の  
 認識能  
 力との關係の意識 (Bewußt) である」と  
 云われ、  
 かります。この場合種々の認識能力とは  
 感性と  
 悟性とを指していゝことが、後の敘述  
 によつて

20 x 20

Kyoto University





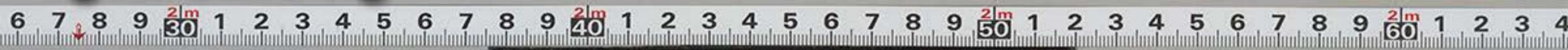


( )

料と形式でありまして、之が反省概念と名付け  
 差異性一致と矛盾、内的なもの、外的なもの、質  
 象と表象が相互に联系しうる関係は同一性と  
 云うこととあります。カントによりますと表  
 い。それを決めるのが反省の果たすところ  
 に属して、いふか、即ち感性に属して、いふか悟性  
 に属して、いふか、即ち感性に属して、いふか悟性  
 は、このA・Bと、いふか、即ち感性に属して、いふか悟性  
 りれ、このA・Bと、いふか、即ち感性に属して、いふか悟性  
 二これは、例えれば、AとBという表象が与え  
 正しく規定され、(B)と書かれておられます。  
 「この意識によつて、のみ諸表象の相互の関係は  
 義が、か、げられ、おられますが、それには引續いて、  
 認識能力との関係の意識による(B)といふ定  
 は、「反省とは与えられた諸表象と吾々の種々な  
 先程のべましたように、反省概念論の冒頭に  
 二、反省概念論と先験的位置論  
 とが、できなかつたのでありませう。  
 つて、しては、把えられた体系の中にはめ込  
 る立場そのものは、少くともカントの論理を以

20 x 20

Kyoto University



りれに座をもつか悟性に座をもつか  
 性に座をもつか悟性に座をもつか  
 二重の關係の仕方を示し、<sup>その例</sup>従つて反省概念は  
 同一性と差異性一致と矛盾といふ~~具~~合に<sup>ツイ</sup>対  
 の形になつてゐるのぢありません。上に挙げた  
 四組の反省概念の各々に属する説明を吟味し  
 てみますと、それらの對<sup>ツイ</sup>の一方、即ち一様性とか  
 一致等は悟性に座をもつもの<sup>と</sup>考へられ、他方  
 即ち相異性と矛盾等は感性に座をもつもの  
 と考へられ、<sup>ツイ</sup>ゐる二つが分ります。悟性に座

をもつとは、例へばAとBといふ表象が單に悟  
 性のみによつて思惟される物一般を表すもの  
 として相互に比較される場合の二つを云い、<sup>悟</sup>感  
 性に座をもつとは、AとBといふ<sup>それらの</sup>表象が感性に  
 よつて与えられた現象を表すものとして相互  
 に比較される場合の二つを申します。このよ  
 うに表象もしくは概念が感性とか悟性などの  
 ような認識能力においてもつ座の二つをカニ  
 トは先驗的位置<sup>deut</sup> (transzendental Ort) とする  
 りゆる表象もしくは概念に對して、このよ  
 うな

20 x 30

Kyoto University



位置を与える仕方を先驗的位置論 (transcendental position theory) と名づけておきます。従つて反省概念論は先驗的位置論に他ならないと云うことが出来ます。

三、先驗的位置論と体系的 position theory

吾々の課題は、先驗的位置論とカントが体系的 position theory (System) と名付けている範疇論との関係を明かにすることでありませう。はじめは申し

ましたように、人は、かれは反省概念論を彼の本質論は、概念及び反省概念に還元する反省規定を本

質のカテゴリーの中に織込んで、有論や本質論

の構成要素とされ、カントの諸範疇の対応物と相互に联系せしめてあります。既に

に申しましたように、カントとヘーゲルとの立場の相異にもつづいて、カントは反省概念を範

疇とは切はなし、取扱つてゐるのがあります。この裏において、両者を區別しつゝ、しかも両者

の联系をも無視

20 x 20

Kyoto University

